

## 『子どもをいかに愛するか ー家庭編ー』に見るコルチャックの乳幼児の権利

小田倉 泉(埼玉大学)

### 1. はじめに

『子どもをいかに愛するか』(1918)<sup>1</sup>は、ヤヌシュ・コルチャック(Janusz Korczak[本名 Henryk Goldszmit]1878-1942)の代表的な著作の一つである。この作品は、「家庭の子ども」(以下「家庭編」)「寄宿学校」「サマーキャンプ」「ドム・シェロット」の4つの編から成り、最初に「家庭編」が単独で1918年に出版され、その2年後の1920年に「寄宿学校」以降の3編が追加されて出版された。

コルチャックは、1905年ワルシャワ大学医学部を卒業後、「ドム・シェロット」の監督者となるために職を辞する1911年までの6年間、ワルシャワのベルソンズ・ベルマンズ小児病院で働いている。また、1907年にはベルリンへ、1910年にはパリに、最新の医療を学ぶために留学している。『子どもをいかに愛するか 家庭編』の乳幼児に関する記述は、小児科医として乳幼児とその母親に出会った経験をもとに書かれたものである。

1914年の第1次世界大戦勃発時、コルチャックは軍医としてポーランド軍に従軍し、その遠征先の野戦病院で『子どもをいかに愛するか』を執筆している。この作品はあたかも「経験深い老賢人」によって書かれたかのような印象を読者に与え<sup>2</sup>、また日々子どもを目の前に見ながら書かれているかのように思わせる。しかしこの時彼は36歳であり、孤児院の院長として勤め始めてからまだ4年程しか経っておらず、しかも戦場の砲火の中、子どもの姿を見ることなくこの作品を書いている。作品の中の子どもたちの描写は、コルチャックがそれまでの経験の中で出会った子どもたちをいかに注意深く見、記憶していたかを物語っている。

『子どもをいかに愛するか』の中でも「家庭編」は最も多くのページを使って書かれている(『コルチャック選集第1巻[第2版1984年]』<sup>3</sup>では、家庭編：118p、116章。寄宿学校：68p、85章。サマーキャンプ：37p、49章。ドム・シェロット：67p。となっている)。B.S-Theissは、この作品が「あなたへ」という2人称で書かれていることを一つの特徴として挙げ、その「あなた」とは母親、父親、また保育者といった全ての大人に向けられた呼びかけであると述べる。呼びかけのスタイルをとる構成は、ボルノウがこの作品を「ペスタロッチの『シュタンス便り』になぞらえうるかもしれない」と言うように、『シュタンス便り』をモデルとしているとも考えられる。

ボルノウは、コルチャックはこの作品の中で教育の『処方箋』を与えるつもりは毛頭なく、繰り返し個々の子どもの特殊性を強調しているものだと語るが、同時にその特徴のゆ

えに「この本について紹介することは困難である」<sup>4</sup>と述べる。Scheffler もまた、「はっきりとわかりやすく包括的で、また満足させるような解答は無い」<sup>5</sup>と言い、Lifton は、この作品の中にあるものは「子どもの各発達の違い去っていく時間の枠の中での、様々な子どもイメージ」<sup>6</sup>であると語る。ボルノウらが語るように、この作品には理路整然とした教育論の展開は見られず、ひとまとまり毎に「あなた」に対するコルチャックのメッセージや具体的な子どもの姿、子どもとは何かについてのコルチャックの洞察など、それらの羅列のように見える。しかし作品の中に、誕生、成長、発達していく子どもが「人間」であることを突きつける彼の教育論が一貫して流れている。ペスタロッチの『シュタンツ便り』になぞらえ得るものと述べたボルノウは、この作品が「具体的な場面から生まれた直観に満ちている」<sup>7</sup>ことが最も重要な点であると言い、B.Theiss は、これは「タルムードを読むようなもの」で、読む度に新たな解釈が生まれると言う。このような性質が、この作品の全てを詳細に読み解いていくことの難しさではあるが、同時にコルチャックの思想の深みを感じさせる所以だと思われる。

## 2.『子どもをいかに愛するか 一家庭編一』概要

「家庭の子ども」編は、「私は知らない」という宣言から始まる。コルチャックは自分の知る限りのこと以外は書き得ないことを最初に断言している。これは同時に、自分の知らない子どもについて教育論を語る人々の無責任さを叱責するものともなっている。彼にとっては「知らない」ということは「驚嘆に値する」ことであり、「真理にますます近づくため」のものであると「知らない」ことは恥ずべきことではなく価値あることであると言っている。「知らない」ことを前提とすることによって、一般論や仮説から完全に自由となり、子どもの具体的な場面とそこに生じた直観こそが現実であり、また真実であることを訴えるものとなっていると思われる。また、読者自身にも子どもを「知らない」という前提に立つことを彼は求める。

本編は主に母親に向けられた育児書としての性格を強くもつ。コルチャックは、若い母親が自分の直観を信頼すること、子どもをよく観察することを要求している。母親がとかく頼ろうとする医者の一時間の診断よりも、母親の鋭い観察が勝る。母親のなすべきことは、「その」子どもの必要に応じた養育である。コルチャックは、彼自身が乳児の観察によって得た数々の乳児の姿の実例を挙げ、乳児が一個の人格であること、その行動は主体的であり人間として明確な意思に基づくものであることを示している。

この「家庭編」37章から40章には、コルチャックの権利思想を代表する「三つの基本的な子どもの権利（1. 子どもの死に対する権利 2. 今日という日に対する子どもの権利 3. 子どもがあるがままでいる権利）」が書かれている。この3つの権利が乳児をめぐる書かれた中にあるということもまた、示唆に富むものであり、乳児の中に、権利主体としての人間性、人格性を明確に見出した権利論を示すことにもなっていると思われる。

家庭編は、子どもの誕生に始まり、乳児の成長を時系列でたどりながら書き進められて

いる。少しずつ成長し、その行動範囲を広げていく乳児の姿の描写には、援助を求めず自分自身で克服することで周囲の世界を切り開き、また自分自身を理解する乳児が描かれている。コルチャックは乳児の些細な行動の一つひとつを丹念に描き、乳幼児の苦労や喜びを伝えているが、ここにも彼の「子どもの代弁者」としての特性が鮮やかに現れている。

コルチャックの諸作品は子どもに対する大人の誤解と誤った扱いを中心テーマとしている(Kurzweil,1968)<sup>8</sup>が、本編における親、特に母親への要求もまた、大人のエゴが子どもを不幸にすることを訴えている。また、個々の養育環境をめぐる問題については社会の階層、行動規範にその所在があることを指摘している。両親の愛を吸収できる環境もあり、愛されることも育てられることも無い環境もある。そして、明確に示されることは無くとも明らかに存在するその他の影響力もある。コルチャックは、『遺伝』によってのみ一面的に説明できることは何もない(57章)と、子どもを包み込んでいる雰囲気、環境による子どもへの影響を訴え、そこにおいて環境を構成する大人の問題意識を喚起している。

環境をめぐる展開に続き、本編の中盤においてコルチャックは再度「子どもとは何か」(59章)という問いに立ち戻っている。この問いに対して彼は、子どもの身体的成長の変化とは極めて起伏に富んだものであり、学問になっていなくとも子どもが経験する事実であると訴える。さらにその養育については、子どもの必要に沿ったものであるべきことが再び述べられている。このような子どもの身体的特性に対して、彼は子どもの精神構造と特性、その要求と可能性を問うている。この部分には、子どもが人類の中でいかに大きな位置を占めるかが示され、子どもとは「目を留められてこなかった階級、民族」(64章)であると、子ども認識の転換を迫る彼の子ども観が展開されている。

続いて、子どもの経験、遊びに関する彼の具体的見解が述べられる。大人は子どもを誤って理解しており、子どもは現実の世界に生きているもので、遊びの多くは「労働」(75章)である。このような子どもの行動への認識に続いて、再び子ども存在を正しく認識すべきであることと、大人の過ちが指摘される。成長し、大人を知るようになってきた子どもは、大人の行為に困惑し、やがて軽蔑と嫌悪感を示すようになる。子どもの魂とは大人と同様に複雑で矛盾に満ちている。しかし、大人は幻想の権力の中にある(85章)。

大人の言葉ばかりの生活は、子どもを沢山の問題の中に沈めてしまったとコルチャックは指摘し、彼は子どもの尽きることのない「もし」「なぜ」を列挙する(87-89,91-93章)。子どもは数限りない人生についての疑問を頭の中で深く思い巡らしているという事実である。その疑問は、大人の子どもの対する「教育的な」態度の中にある真偽に対しても向けられる(98章,100章)。ここには大人の偽善的態度への非難が満ちている。

子どもの成長と共に、肉体的精神的問題が発生する。この時期、個の発達は精神を動揺させ肉体を攻撃するが、その成熟の過程の困難に大人は気付かず、むしろ「若者に不均衡と不安の制服を着せてきた」(105章)のではないかとコルチャックは批判している。彼はこの成熟の時期を「労働、最も重苦しい作業」(108章)であると、若者への理解を訴える。

この成熟期にある子どもは「人生の半分に」ではなく「人生のただ中」(111章)におり、

この過渡的な年齢を駆け抜けて子どもは大人になる(113章)。この子どもに対して、教育者は何をなすべきか、教育者とは子どもが自分の人生を生きる道を探る計画を立てることを援助するものであることを、コルチャックは示す。

若い時代は陽気さと幸福に満ち、気高いものであるが、大人はその気高さを「根こそぎ奪おうと」(115章)する。子どもは若者に成長したが、その成長の各段階で子どもの生を妨げる大人の存在が常に伴っている。

コルチャックは冒頭において、この作品には分かりやすい「指示や処方箋」(1章)が無いと述べているが、本編最終章には、読者からの要求に答えるような「良く準備された処方や応用方法のある平凡な知識」はないということが改めて述べられている。そして最後に彼は、母親が自分の直観を信頼すべきこと、書物からではなく自分自身で育児に必要なインスピレーションを得るべきことを再度強調して本編を終えている。

### 3.コルチャックにおける「乳幼児」

#### (1)独立した子どもの生

「あなたはいう、『私の子ども』と。

例えば妊娠のときであっても、あなたが『私の子ども』とそこまでいう偉大な権利はない。

…

その時、同時に、彼、子どもが語っている。『自分の人生を私は生きたい』と。母は言う『もう自分の人生を生きなさい』と。

…

『私の子ども』。

いや、何か月か長き負担といえども、そして、数時間の長き出産といえども、子どもはあなたのものではない。』<sup>9</sup>(2章)

コルチャックは、子どもの生が胎児に始まると明確に述べる。例え母親の呼吸、血液が子どもを生かしているとしても、母親の食事が子どもの身体を形作るとしても、コルチャックは胎児を母親から独立した一個の生と捉える。これは、彼が人生のどの段階も比較し得ない価値を有するところと一貫している。同時に、母親に対して子どもを彼女の所有と見なすことに対してくりかえし異議を唱える。コルチャックは、赤ん坊に対する母親の愛情を認識してはいたが、「私の子ども」ということと、子どもへの愛情は同質のものではない。子どもは愛情の対象であっても、所有の対象ではない。子どもは独立した一個の人格としての生であるからである。

「あなたはいう、『私の子ども』と。

いや、これは母親と父親の、祖父と曾祖父の共通の子どもである。…

どのあなたの子どもの中にも、世代の永遠の連鎖のなかにある最初の環を見ているのである。自分の他者

たるその子に、眠っている自分のその細片を見つけられたい。…」<sup>10</sup> (4章)

コルチャックは母親の子どもを「自分の他者たるその子」と呼ぶ。子どもは、何世代にもわたる生命の連鎖の一環であって、その意味においても子どもは母親の所有物ではない。子どもは、世代間を繋ぐ一環として自分の生の責任を負う存在であり、子どもと同様に連鎖の一環である母親とは独立した環である。このように、3度にわたって「私の子ども」であることを否定する描写は、一見母親に対して過酷な宣言を行っているかのように見えるが、子どもの人格の独立性が人間の所有物にはなり得ない価値をもつものであることを訴えようとしていると読み取れる。

「さらに不思議なことは、彼がもはや彼女自身でなく、それ以上のものとなるということだ。彼らふたつの生活において子どもの恐怖が自分自身の恐怖の一部であったことはなお最近のことだ。…不思議なことだ、以前子どもは彼女と密着していて、自分より大事なもので、その安全をより強く確信し、彼のことはよりよくわかっていて。」<sup>11</sup>(7章)

母親にとって自分自身のようにであった子どもが自分から分離し、別個の人間として生き始めたとき、子どもが自分の意のままにならない現実と直面しひどく当惑する。しかし、そこから子どもを知るための母親の努力と成長が始まるのであり、子どもと共に成熟していく母親をコルチャックは激励するのである。

## (2)「子どもとは何か」

「あなたが生んだ子どもは 10 フント\*。その内 8 フントは水、そして、後はひとつかみの炭素、カルシウム、窒素、硫黄、燐、カリウム、そして鉄である。あなたは 8 フントの水と 2 フントの地球の塵埃を生んだのだ。…この塵は、穂と草と樫の木、椰子の、そしてひな鳥と子ライオンと子馬、子狐の類の姉妹なのである。その中に、感じたり、調べたり、努力したり、集中しようとするもの、喜んだり、愛したり、頼ったり、憎んだり、そして、信じたり、疑ったり、許したり拒否したりするものがある。

この塵は、思考によって、すべてのものを包み込む。…我々の精神の中身は、距離を無視して初めて手に入れることのできる全宇宙でなくして何なのか。

人間の本質の矛盾がそこにある。地球の塵埃が神の住むところとなったのである。」<sup>12</sup> (3章)

「子ども、これは、全面象形文字で覆われた羊皮紙である。その一部だけはあなたが読み取ることはできる。…

子どもと無限。

子どもと永遠。

子どもは空間の広がりの中の塵である。

子どもは、時代の中の瞬間である。」<sup>13</sup> (4章)

---

\* フント=ポンド

本編には、彼の「子どもとは何か」という問いとそれに対する彼の認識が様々な表現をもって表されている。子どもは思考し、神を宿す10フントの「塵」であり、大人にとっては読み取りがたい「羊皮紙」である。ここには、物質的限界をもつ人間のはかなさと、精神の深遠さとが同居する子どもの有様が示されている。

「ただ際限のない無学と見解の浅はかさだけが見落としてしまうことだが、それは、乳児というのは、それ自身、生まれつきの気質と知性の諸力と心身の感覚と生きた経験から成り立っている、ある人格、厳密に言えば、一個の人格である、ということだ。」<sup>14</sup> (25章)

彼がくりかえし「子どもとは何か」に対する彼の認識を提示しているのは、子どもを徹底して人格的存在として認識することを目指しているからだと言えるだろう。コルチャックはすでに胎児に、独立した生を見出しているが、とすれば、乳児が「気質と知性の諸力と心身の感覚と生きた経験から成り立っている」と認識することは当然である。

「赤ん坊というものは外界獲得の志向を強くもつものである。…赤ん坊は彼がもつ(まだ少ない)知識の範囲で、そして、彼が自由にできる手段(まだ小さなものだが)を使って、行動する。」<sup>15</sup> (30章)

子どもは赤ん坊の時にすでに自覚的であり、自律的である。赤ん坊は弱く受動的なのではなく、周囲の世界に向かって積極的に働きかける。この能動的な赤ん坊の実態は、それまで描かれてきた赤ん坊の姿の延長上にあるがゆえに、極めて自然且つ説得力をもつ。それはコルチャックの子ども描写が、彼自身の詳細な観察の中で現実に目にした子どもの実態という現実だからであろう。

「子どもとは何か。身体的な面にかぎって言えば？それは発達しつつある肉体である。」<sup>16</sup> (59章)

「我々大人の精神構造と子どもはどこが異なるのか。その特性はどこにあり、その要求はどのようなものか。潜在的な、まだ現れていない可能性とはどのようなものか。我々と伝統的な二分において並び立ち、生活を共にしているその人類の半分を占める者たちとは何か。…

もし、人類を大人と子どもに分けるとすれば、また、人生を子ども時代と成人時代に分けるとすれば、世界における子どもたち、また人生における子ども時代というものは大きい、極めて大きいものだ。…

感性の分野ではその力において我々にまさっている。なぜならそれを阻止するものが作り上げられていないからである。

知性の分野では、少なくとも我々と同等である。不足しているのは経験だけである。」<sup>17</sup> (64章)

全116章から成る本編のほぼ中間において、コルチャックは「子どもとは何か。」という問いを改めて投げかけている。身体的には、子どもは「バランスの変更を伴う」「成長の時

代の不均衡」の中にある段階である。このような身体的特徴をもつ一方で、子どもの精神は、経験上の不足があるのみで、大人と同等、あるいは大人に勝るものであるという。

Kurzweil<sup>18</sup>は、コルチャックが、子どもとは本質的に大人とは違っていないこと、子どもは大人と類似した方法で考え、感じることを、子どもは大人と同じ衝動、願望、感覚をもっており、その差は単に量的なものだと捉えていたことを述べている。Grol-Proloczyk らが「子どもの善と大人の劣悪さとは、コルチャックが教育理論の基礎にしているまさしく基本的な前提であるように思われる」<sup>19</sup>と言うように、子どもはその性質において大人に勝るものである。しかしながら、子どもは常にどの成長の段階にあっても、大人に誤解されている。

「私は、子どもが強く記憶にとどめ、また、我慢強く待つということも知らなかった。…彼らが実際にどのようなあり、そして、どのようにありうるのかということについて困難でも考察しなければならない。」<sup>20</sup>(69章補足)  
「我々は、子どもに子ども時代の制服を着せ、そして、子どもは我々を愛し、尊敬し、信じていると、また、子どもは無邪気で信じ易く感謝の気持ちを持つものと信じている。」<sup>21</sup>(81章)

彼は、大人の子どもに対する誤った認識を差し入れつつ、「子どもとは何か」について語り続けている。彼の記述の中に大人の誤解、過ちへの批判が頻繁に登場していることは、読者に対して子どもを正しく認識することができた、正しく理解した、という錯覚を決してもたせないという効果をもつようにも思われる。

### 3.乳幼児の権利

家庭編の中にコルチャックの権利論を探すと、「3つの基本的な子どもの権利」は、最も明確に述べられたものであるが、このほかに「権利」と名のつけられたものが作品の所々に挙げられている。

「母乳に対する権利」<sup>22</sup>(18章補足)

「一つの活動の分野での二つの望み、そして二つの権利の衝突…子どもは座薬を口にもっていかうとする、私はこれを彼に許すことはできない、彼はナイフを欲しがっている、私はそれを与えるのは不安だ。彼が花瓶に手を伸ばそうとしている、私はそれを見ていられない。ボールを使って私と遊びたがっている、しかし私は本を読みたい。私たちは彼の権利と私の権利の境界を見定めなければならない。」<sup>23</sup>(41章)

「1年のうちに初期の体重の3倍となる赤ん坊は、休息に対する権利をもっている。また、瞬く間に彼の心理的な発達をやり遂げようとする道のりは、同様に彼に忘れる権利を与える」<sup>24</sup>(61章)

「われわれと伝統的な二分において並びたち、生活を共にしている人類の半分を占める者たちとは何か。我々は彼らに明日の人間と言う負担を強い、今日を生きる人間の権利を与えていない。」<sup>25</sup>(64章)

これらの権利は、乳幼児が生きる上で本能的に求める欲求と言い換えることもできる。

41 章に書かれた「彼の権利」に象徴されるように、乳幼児の好奇心がもたらす本能的な活動要求を、コルチャックは「彼の権利」であるとし、「母乳に対する権利」や「休息に対する権利」は、身体的な要求そのものである。コルチャックは、個別具体的な要求を権利として挙げながら、「今日を生きる人間の権利」といった、普遍的な人間の権利を挙げる。いくつもの権利を掲げながら、コルチャックはそれらに優劣・順位をつけることなく書き連ねている。

「家庭編」には、「権利」として具体的に命名してはいないけれども、代表的なコルチャックの乳幼児の権利を示した箇所がある。国連子どもの権利条約の言葉を借りれば、それは乳幼児の「意見表明権」である。

ここでは、この「意見表明権」について国連子どもの権利委員会(以下「権利委員会」)発表の「一般的注釈 第7号」の主旨と共に少し紹介したい。

### (1)乳幼児の「意見表明権」

2005 年、「乳幼児期における子どもの権利の実施 (Implementing Child Rights in Early Childhood)」と題した権利委員会発表の「一般的注釈 第7号(General Comments No.7)」<sup>263</sup>は、乳幼児の権利が条約成立時を含む今日まで見逃されてきたこと、新生児であっても権利の保有者であることを明らかにして以下のように述べている。

「この権利は、自己の権利の促進、保護、監視への積極的な参加者としての乳幼児の地位を強化する。乳幼児の—家族、地域社会、及び社会における参加者としての—主体性の尊重は、年齢及び未成熟性を理由に、不適当なものとしてしばしば見逃され、又は拒否されている。…本委員会は、条約 12 条が、年少の子どもと年長の子ども、双方に適用されることを強調したい。権利の保有者として、たとえ生まれたばかりの子どもであっても、自己の見解を表明する資格を与えられ、それは『子どもの年齢と成熟に応じて考慮される』べきである(第 12 条第 1 項)。乳幼児は自分たちを取り巻く環境に非常に敏感であり、そして、自己のユニークなアイデンティティを自覚することに加えて、自分の周囲の人々、場所、生活習慣を大変急速に理解していく。彼らは、話し言葉、書き言葉を用いてコミュニケーションができるようになるはるか以前に、選択し、自分の感情、考え、願いを様々な方法で伝達する。」

27

権利委員会は、乳幼児の用いる言語とは、「話し言葉」「書き言葉」ではないが、彼らは彼らの伝達手段で伝達・表明していることを 2005 年の時点でようやく明らかにしている。コルチャックは、「家庭編」において、以下のように書いている。

「母親が、(乳児の)はつきりしない未完成の言葉の意味を言い当て、その子どものはつきりしない最初の言語を理解したときに感じることのできる喜びはどれほど純真なものだろうか。…」

では、涙と微笑みの言語、二つの目と唇の形の言語、身振りや吸い付き方の言語は？」<sup>28</sup>(13 章)

(丸括弧()内は、著者による補足)

「赤ん坊は、顔の表情という言葉で、印象と感情の記憶という言葉で話しているのである。」<sup>29</sup>(34 章)



乳児の言語は「涙と微笑み」、「二つの目と唇の形」、「身振りや吸い付き方」「顔の表情」という「言語外の言語」であって、乳児は、表情やしぐさ、泣き方の違い等、乳児の示す「言語」によって、母親、親密な養育者に対して意思表示をしている。この意思表示を行う「言語」は、「一般的注釈 第7号」の述べる「様々な方法」である。ここで、コルチャックは、乳幼児の「言語」による「意見表明」を「権利」としては明記していないが、乳幼児が、彼らの「言語」を用いて伝達しようとしている意思、「意見」を聞き取る責任と義務を、大人に強く要求している。

「彼女(母親)の目と耳と乳首がつかんだ 100 の兆候が、また 100 の極々小さな不満が、『気分が良くないの、本当に具合が良くないの』と、彼女に教えている。」<sup>30</sup>(14 章) (丸括弧内は、著者による補足)

「子どもは誕生のまさにその最初の日から泣いているが、彼女はそれ以上のことを何も観察してこなかった。子どもはひっきりなしに泣いているのに！」<sup>31</sup>(16 章)

子どもの権利尊重を大人に要求するコルチャックは、しばしば大人への痛烈な非難や批判という形をとるが、ここにも母親に対する彼の批判がある。

乳幼児が、「しくしく」泣いたり、「突然金切り声をあげて」泣いたり、「突然泣き止んだ」りすることで、彼らの「言語」を用いて「意見表明」を実行していると言えるのであれば、乳幼児の側において自らの成長、保護、幸福のために必要な行動を起こしている、ということである。乳幼児の側においてなすべき事柄が実行されているのであれば、権利を具体的、実際の行使の完成の形へと導く役割を果たすのは、大人の義務と責任であると言える。

乳幼児は体全体で世界と接しており、乳幼児の行動はその存在全体を含むものである<sup>32</sup>。それゆえ、乳幼児が言語外の方法で示す感情や意思、願望は、乳幼児自身を表出している。乳幼児の意見表明を権利として尊重することは、乳幼児の存在全体の受容と尊重を保障させようとするものである。

福田は、意見表明権は子どもの「居場所を実現する権利」<sup>33</sup>であり、「子どもの権利の本質」<sup>34</sup>と解釈し、子どもの呼びかけに応答することは、子どもを 1 人の人間主体として全面的に認めること、つまり「ありのままに受け入れる」ことであると述べている。また、「欲求(意見)」を表明しても、「応答してもらえないとき、その者の存在そのものが無視され、人間の尊厳が否定される」<sup>35</sup>と、表明した意見に対して応答されないことが、子どもの人間存在を無視することになると警告している。福田のこの指摘は、意見表明権が、コルチャックの挙げる基本的権利、つまり全面的な存在の受容と不可分の関係にあることを示すものと言えるだろう。

## (2) 乳幼児の意見表明権の実施

乳幼児は、能動的な社会的主体であるが、全面的に親やケア提供者に依存しており、「その権利を行使するに当たって助言、指導及び援助を必要」<sup>36</sup>とする。意見表明権が、乳幼児

によって「意見表明」されたとしても、それを受け留め、実際的な効果をもたらす権利の実施へと至るには、大人の働き、または介入が不可欠である。

権利委員会のクラブマン委員によれば、乳幼児が「意見表明」したなら、それが聞かれ(to be heard)、応えられ(to be responded)、尊敬されなければならない(to be respected)<sup>37</sup>。これが、乳幼児の意見表明権が保障されていく重要な基本的道筋であると考えられる。

この過程によって乳幼児の意見表明権を実現する「大人」とは、人間存在として乳幼児を尊敬し、かつ「その子どもの興味、ニーズと調和した重要な人物」<sup>38</sup>であり、また「乳幼児に同一化できる間主観的な心的状況」<sup>39</sup>をもつ大人であることが求められる。乳幼児と、意識と価値を共有し、彼らの「言葉」を傾聴し、「言葉」通りに理解し、尊重することのできる大人との協同作業によって初めて、意見表明権は実施されると言えるのではないだろうか。

権利は、単にもっているという現実ではなく、それが行使・実施されたときに初めて意味を為すものである。乳幼児が保有する意見表明権によって、乳幼児の最善の利益がこれまで以上に保障され、個々の乳幼児が、その存在を常に受容される乳幼児期を送るために、協同者としての大人の意識の深化が必要であろう。

#### 4.「権利」を尊重すること、子どもを「愛する」こと

コルチャックが本作品のタイトルに込めた「愛」とは、センチメンタルな愛の契約ではなく、「子どもといつも共にあり、子どもの声を聞きとる教育的愛の契約」であるとB.Theiss<sup>40</sup>は語る。B-K.Ganse<sup>41</sup>は、『子どもをいかに愛するか』の中でコルチャックが言おうとしている子どもの権利とは、子どもが一人の人間として尊重されること、人間としての尊厳を尊重されることである、と述べ、それは子どもの権利条約で規定されている以上のものであると述べている。Ganseは、コルチャックにとって「子どもをいかに愛するか」ということは、「子どもをいかに尊重するか」ということであり、「子どもを愛する」ということは「子どもを真剣に尊重すること」であると断言する。そして、大人にあるのは、子どもに強制したり指揮したりする権利ではなく、子どもをもっと理解し、寄り添い、尊重し、子どもから学ぶ権利である。コルチャックの言う子どもの権利の尊重とは大人側の問題であり、それゆえにコルチャックは、大人に対して自分を見つめること、自分を知ること、自分を高め成長させることを求める。教育実践論の立場からコルチャックを論じているJ.Berding<sup>42</sup>は、「子どもの権利を尊重するということは、教師の精神に確かな態度を要求するというだけでなく、それが組織化されなければならない」として、権利尊重が保障されるためのシステム構築をも求めている。

Berdingはまた、コルチャックの大人社会に対する辛辣な批判が一人ひとりの子どもへの無条件の共感と結びついており、大人と子どもの緊張関係、諸問題をコルチャックが真に教育学的な問題へと変え、「子どものニーズを子どもの権利に『翻訳した』」のだと言う。コルチャックは、子どもの「ニーズ」を、「権利」という形にすることによって子どもたち

と共に生きる方法を探求した。従って、コルチャックの挙げる子どもの権利の一つひとつの個別的な意味を捉えるだけでは十分ではなく、それらを総じて見えてくるところの、子どもが子どもらしく人間として生きることの保障として捉えていくことが必要であろう。そのための、大人の側に求められる精神的態度をいかに形作っていくかということが、今後の課題である。

**【『子どもをいかに愛するか』の引用箇所の翻訳は、塚本智宏先生(東海大学)による訳を使用させて頂きました。】**

- 
- <sup>1</sup> Janusz Korczak “How to love a child” *Selected works of Janusz Korczak* ed.Martin Wolins trans.Jerzy Bachrach Springfield, Virginia,1967 pp.81-462
- <sup>2</sup> Barbara Smolińska-Theiss 「ヤヌシュ・コルチャック—いかに子どもを愛するか」講演 2009.11.24 於：埼玉大学
- <sup>3</sup> Janusz Korczak “Jak kochać dziecko” *Janusz Korczak PISMA WYBRANE I* Nasza Księgarnia Warszawa 1984 pp.91-382
- <sup>4</sup> O.F.Bollnow (浜田正秀訳)「ヤヌシュ・コルチャック著『子供をどのように愛すべきか』について」『全人教育』250号 1970, pp.6-10.
- <sup>5</sup> Sigrid Tschöpe,Scheffler *Liebe und ihre Bedeutung für die Erziehung in der Padagogik Johann Heinrich Pestalozzi und Janusz Korczak* HAAG+HERCHEN Verlag GmbH 1990. p.172
- <sup>6</sup> Betty Jean Lifton *The King of the children* St.Martin’s Griffin New York 1988. p.80
- <sup>7</sup> Bollnow, 前掲,p.7
- <sup>8</sup> Zvi E. Kurzweil, "Korczak's Educational Writings and the Image of the Child." *Jewish Education* 38, no. 1, 1968. p.19.
- <sup>9</sup> Korczak op.sit,“How to love a child ” pp.84-85
- <sup>10</sup> Ibid. p.87
- <sup>11</sup> Ibid. p.91
- <sup>12</sup> Ibid. pp.85-87
- <sup>13</sup> Ibid. pp.87-88
- <sup>14</sup> Ibid. p.113
- <sup>15</sup> Ibid. p.118
- <sup>16</sup> Ibid. p.158
- <sup>17</sup> Ibid. pp.164-166
- <sup>18</sup> Kurzweil, op.sit, pp.26-27
- <sup>19</sup> Regina and Czeslav,Grol-Prokopczyk "Child and Society: Reflections on Janusz Korczak's Educational Philosophy." *Canadian Jewish Outlook*, 15, no. 3 Mar./Apr., 1977, p.13
- <sup>20</sup> Korczak op.sit,“How to love a child ” p.175
- <sup>21</sup> Ibid. p.191
- <sup>22</sup> Ibid. p.105
- <sup>23</sup> Ibid. p
- <sup>24</sup> Ibid. p.161
- <sup>25</sup> Ibid. p.165
- <sup>26</sup> Committee on the Rights of the Child “GENERAL COMMENT No.7 (2005)” 2005.November 1 URL:[http://www.unhchr.ch/tbs/doc.nsf/898586b1dc7b4043c1256a450044f331/cd82be0fa6116036c12570b50039aa77/\\$FILE/G0544829.pdf](http://www.unhchr.ch/tbs/doc.nsf/898586b1dc7b4043c1256a450044f331/cd82be0fa6116036c12570b50039aa77/$FILE/G0544829.pdf)
- <sup>27</sup> op.sit. “GENERAL COMMENT No.7 (2005)” pp.6-7
- <sup>28</sup> Korczak op.sit,“How to love a child ” p.99
- <sup>29</sup> Ibid. p.124
- <sup>30</sup> Ibid. p.100
- <sup>31</sup> Ibid. p.101
- <sup>32</sup> IPPA the Early Childhood Organization, Implementing a focus on participation *A Guide to General Comment 7:Implementing Child Rights in Early Childhood* Bernard van Leer Foundation 2006, p.89
- <sup>33</sup> 福田雅章「あらためて『こどもの居場所』を検証する」『月間社会教育』49巻(1), 通号 591,国土社, 2005年, pp.51-59.

- 
- <sup>34</sup> 福田雅章 「『子どもの権利条約』における発達と指導」『学童保育研究』第3号, 学童保育指導員専門性研究会, 2002年, p.37
- <sup>35</sup> 同上, p.36
- <sup>36</sup> United Nations Committee on the Rights of the Child “*Day of Discussion: Implementing Child Rights in Early Childhood*” 2004. September 17  
URL: <http://www.ohchr.org/english/bodies/crc/docs/discussion/earlychildhood.pdf>  
世取山洋介訳「『乳幼児期における子どもの権利の実施』に関する一般的注釈 第7号(2005年)完全翻訳」  
URL: <http://www.dci-jp.com/crc-7.pdf> 参照
- <sup>37</sup> ロタール・クラブマン, 堀尾輝久 「対談『子どものために』ではなく『子どもの視点から』子どもの最善の利益と意見表明権をとらえなおす」『クレスコ』6巻2号 (通号59) 大月書店 2006.2 p.32-37
- <sup>38</sup> IPPA the Early Childhood Organization, op.sit., p.89
- <sup>39</sup> 太田いく子 「乳幼児が『権利をもつ』とはどういうことか —乳幼児と親・養育者の間主観的關係にもとづく『児童の権利条約』三条一項および十二条一項の再検討—」『広島法学』広島大学法学会 29(2) 107号 2005年 pp.45-79
- <sup>40</sup> B.S-Theiss, 前掲.
- <sup>41</sup> Waltraut Kerber-Ganse “Korczak looked at as a legend or a challenge, as a martyr or an analyst?” 講演 2005/10 於: 横浜
- <sup>42</sup> Joop.Berding, “Meaningful Encounter and Creative Dialogue: The Pedagogy of Janusz Korczak” *Journal of Thought*, Winter 1995. pp.23-31